

来週から待降節が始まる。今日は、これまで注目しなかった待降節の記述に焦点を当てよう。

マリアがエリサベトを訪ねる場面だが(ルカ 1:39~45)、そこはあたかも二つの流れの合流点であるような気がする。つまり突如、天使ガブリエルが現れて、洗礼者ヨハネの誕生を告げる一つの流れがあり(1:13)、その同じ天使が、神の子イエスの誕生を告げるもう一つの流れがあつて(1:30~31)、これらが合流する。

流れのただ中で、天使は「恐れることはない」と語りかけ、彼らの不安(1:12)と困惑(1:29)を取り除こうとする。一つは老女の懐妊で中傷が予測され(1:7)、もう一つは婚約者以外による妊娠で恐ろしく断罪される(1:31)。要するに、神の働きが及ぶ当人にしてみれば、榮譽ある使命では到底ありえない。

「流れの合流点」というと、私はある懐かしい光景を思い出す。子供の頃、よく魚釣りに行った二つの川の合流点だ。水流の衝突が深い淵をつくり、流れは不規則に渦を巻き、見るからに危険。

親たちはそこへ行くことを禁止したが、仲間も私も悪童で、深みに落ちたこともあつたが懲りることなく、そこへ通つた。水が不規則に渦巻く合流点は、異界の入り口であるかのように少年の私は感じていた。

マリアとエリサベトの合流は渦をつくり、神の子イエスが世に現れるための神秘を胎蔵していた。

「マリアの挨拶をエリサベトが聞いたとき、その胎内の子がおどつた(1:41)」。未知の身体感覚だが、エリサベトは聖霊によって意味を知り(1:41)、それを言葉で言い表した(1:42)。

「わたしの主のお母さまがわたしのところに来てくださるとは、どういうわけでしょう(1:43)」。彼女らは親類で(1:36)、老女が少女に謙ることはありえないが、両者の出会いの本質は、イエスと洗礼者ヨハネとの合流なのだ。

合流して渦巻く川が神秘を孕んでいるように、この合流の渦巻きには大いなる創造が隠されていた。

ヨハネはいわば露払いで、「エリヤの霊と力で主に先だつて行き～民を主のために用意する(1:17)」。その半年後に誕生するイエスは、露払いを受ける「主」として「神の子と呼ばれる(1:35)」。

この二つ流れは見えない本質であり、聖霊によって、エリサベトを介して聴きうる言葉となる(1:43)。酸素と水素が化学変化して「水」となるように、見えない両者は出会うことで見える実体となっていく。

「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いでしょう(1:45)」。これはエリサベトがマリアを讃えた言葉だが、マリア自身「胎内の子(1:42)」の響きを身に感じて、「必ず実現する」と信じただろう。

出会いによって、彼女らの否定的だった当初の気持ちは、神への讃美に変わった。自分の日常を超える神の働きを担うことへの驚くべき榮譽、未知の大いなる希望へと変化したのだ。

「神は人でないから、偽ることはない。人の子ではないから、悔いることはない。言われたことを、なされることがあろうか。告げられたことを、成就されることがあろうか(民数 23:19)」。

この預言のように、マリアは「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた」。これこそが何よりの恵み。

降誕は「永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない(ルカ 1:33)」確かな徴。私たちの根本は、永遠に、キリストによって治められる。私たちも相互に合流し、真実をこの身に響かせたい。



《おまけのひとこと》

互いに響き合うのは 内在するキリストが共振し合うから 同一音程の振れ幅がもっとも大きく
次にオクターブ 調和する五度や三度もいいが 不協音程は 和音を次々に変異させる創造の響き